

紅緑偏「滑稽俳句集」を読み解くⅢ

2009.08.09 （聞き手 高橋素子）

高橋 前回、前々回の二回に亘って、「滑稽俳句集」の「凡例」と「自序」の難しい文章や言葉を分りやすく楽しくご解説戴きましたが、今回からは、いよいよ108年前の滑稽俳句の数々をご披露する事になります。また面白いご解説期待しています。

会長 面白く解説しようというより胸が高鳴る思いです。
私たちが今作っている滑稽句とどうちがうのか、あるいは同じなのか。滑稽についての考え方がどうちがうのか、同じなのか・・・大変に興味があります。

高橋 ごめんなさい。私も同じ思いなのですが・・・つい会長には、滑稽を期待して・・・（笑い）

まず、「滑稽俳句集」の目次が書いてありますね。凡例（編集方針）の二項目に書かれていた通り春夏秋冬に分け、その各々を天文、時令、地理、植物、動物、人事、詠物の七門に、そしてそれぞれに季語が七ページに亘って書かれていますね。

会長 季語の分類の仕方は現代のそれと同じ・・・というか。この頃すでに 歳時記分類の型は出来上がっていたということですね。

高橋 では、いよいよ本題の108年前の滑稽句
に・・・
期待でわくわくして来ましたが、最後の冬（詠
物）虚子の句まで百七十四ページもありますね。
一ページに多いところで十句、少ないところで
四～五句ありますから、えーと全部で・・・
ウン！大変な句の数になります。・・・（笑い）

会長 紅緑が可笑しい俳句や斬新な俳句を手当たり次第
に集めたわけですから・・・集めた句の数はもっと
多かったわけですね。

高橋 えっ！もっと沢山！
それでは、春の「天文」一句目、季語は「初
日」。現在では「新年」の季に属してますが、也
有の句ですね。ドキドキしてきましたが・・・

☆ 食ふて寝て起きて見たれば初日哉

あれ！意外と平凡ですね？
いつもと変わらぬ生活をして起きて見ると、今日
は元旦なんだというちょっとした驚きを詠んだ滑
稽句ですね？

会長 初日というのは特別なもので多くの人が神妙に待
ち構えて拝むものです。それを食べて寝て・・・起

きたら初日は疾うに上ってしまっていた。
とまあ初日の尊厳を否定的に書いている・・・かなり面白いですよ。

高橋 すみません。
詠みが足らなかった様ですね。（笑い）

では、二句目の季語は「初空」これも現在では、「新年」の季に所属していますが、一茶の句ですね。

☆ 初空を今こしらへる烟かな

解字すると、「烟の因は香炉からけむりたちのぼるさまを示す会意文字」と辞典にはありますね。そのけむりが元旦の大空に立ち昇る様を詠んだものと思って良いのでしょうか？

会長 香炉ですか・・・知りませんでした。
しかし、高橋さんの解説を聞いてわかってきました。
香を焚いて烟を立ちのぼらせて初めて正月の空になる。卒業を今こしらえる寄せ書きよなてものでしょう。その存在を確実に演出する。といもので 肝心な空は舞台装置で主演は香煙という可笑しさですね。

高橋 次の季語は、「霞」で八句もありますよ。

☆ 無いものゝ有ものつゝむ霞かな 也有

無いものは霞で、有ものは、現実に見える川とか山とかですね。ふっふっふ！確かに也有は理屈っぽいですね。（笑い）

会長 うむ・・これは機智俳句の感じもありますね。
「無い」と「有る」をうまく使った可笑しさで無いもので包めるというのが可笑しい。霞の正体を暴いているとも言えます。

高橋 成る程、そうですね。二句目は

☆ 山寺や撞きそこなひの鐘霞む 蕪村

流石！蕪村！情景が目浮かび、どこか懐かしい気分にもなりますね・・・

会長 鐘霞む・・は鐘の音が霞む・・と言う意味でしょう。ここでも霞むは本来は視覚的なものですが、音が霞むとして聴覚のものにすりかえている可笑しさですね。

高橋 三句目は、一茶の句ですね。

☆ 霞みけり憎い宿屋も迹の村 一茶

憎い宿屋ということですから、そこで何かひと悶着あったということですね？

会長 宿屋でのひと悶着は宿賃のことだったりするわけですが、ここでは「悪印象が霞む」として「視覚のかすみ」を「思い出」つまり「抽象」に置き換えています。

高橋 四句目、これも一茶の句ですね。

☆ 霞む日や嘸天人の御退屈 一茶

霞む日は、さぞやてんにんもお退屈・・・ということとは、天界に住む神々が下界の様子が霞んで見えないから・・・ということですね？

会長 俳句は先ず自身のことを詠む。次に他人のことを詠む。すると川柳に近づく。この句が俳句的なのは「切れ字」を使っているからです。切れ字を使わなければ 霞む日の嘸天人の御退屈 となります。川柳に近いですね

高橋 五句目は子規、六句目は虚子の句ですよ。

☆ 日本は霞むで富士もなかりけり 子規

☆ 欠伸して霞吸ふやひまな人 虚子

会長 子規は、日本は霞むで・・・と大きく出ましたね。
しかし、富士山も無いだろう としているのは見えないものを言うことで「観念」ですね。
虚子の、欠伸して霞吸ふやひまな人
この句は霞の持つ倦怠感を表現していますが
欠伸をして口を大きくあけると 霞を吸い込むことになる。それが可笑しい。

高橋 ☆ 霞から鬼出でんとす浅間山 田天外

☆ 盗人の財布くはへて霞けり 紅緑

ふふ！八句目の紅緑自身の句、時代劇でよく見る光景ですが、表現が面白いですね？

会長 前句は、霞から鬼出でんとす浅間山・・・浅間山は活火山で、当時は度々噴火していたのではないで
しょうか。溶岩流を「鬼押し出し」としてそれを見せる 鬼押し出し円もあります。霞んでしまうと鬼しか見えません。その通りでしょう。断定から生れる可笑しさですね。

高橋 次の季語は「陽炎」で三句ありますよ。
一句目も二句目も一茶の句ですね。

☆ 陽炎や手に下駄はいて善光寺 一茶

☆ 陽炎やうばやが前の箸の山 一茶

一句目は「手に下駄はいて」・・・つまり四つん這いになって善光寺参りをしたという事でしょうか？

二句目は、「うばやが前の箸の山」で私は、芭蕉も蕪村も食べたと言われる近江草津宿の「うばがもち」を思い出してしまいますが・・・

信長に滅ぼされた近江源氏佐々木義賢より三歳の曾孫を託された乳母が郷里草津に戻り、道端で餅を売ってこの幼君を育てたと謂われる美談で、誰が言うともなくついた名が「姥（乳母）が餅」。

徳川家康からは、お褒めの言葉と流竹葉金を貰い、蕪村、近松門左衛門、広重、北斎らも浄瑠璃や浮世絵、東海道名所図会に「姥が餅」を取り上げ

☆ 家康も芭蕉もたべた姥が餅

☆ 広重も蕪村もたべた姥が餅

とその評判はたちまち全国に広まったと言われています。そして蕪村も俳句に

☆ 東風吹くや春萌ゑ出でし姥が里

と詠んでいます。・・・信濃の柏原生まれ十五歳で江戸に出て三十歳の春、西国に旅立った一茶も「姥が餅」の評判は当然知っていたと思われるので、京に入る前に近江の草津でこのお餅を食べて詠んだ句だとは考えられませんか？

会長 陽炎や手に下駄はいて善光寺・・・障害者を見てつくった句ですね。当時はこれが滑稽だったのでしょう。今は障害者も健常者と同じ権利がある。ということですから滑稽ではありませんね
陽炎やうばやが前の箸の山・・・高橋さんのおっしゃる通りでしょう

高橋 えっ！一句目は障害の有る方の・・・？
知りませんでした。しんどくて四つん這いになったのが滑稽なのかと・・・？（笑い）

二句目は、「名物に美味しいものなし」といいますが、これ、なかなか美味しいのです。私は、近江生まれではありませんが、長くこの地に暮らしていますので、つい長々おしゃべりを・・・ごめんなさい。

三句目は、

☆ 陽炎に手をのばしけり石荷ひ 五明

石荷なひが実際の石ではなく、石かと間違えて陽炎の方へ手を伸ばした？ということでしょうか？

会長 石を運搬するために縄をかけているのです。石は太陽熱で温められて表面に空気の粗密が出来て・・・陽炎が発生するから陽炎に手をのばしているように見えるのです。

高橋 石と間違えたと言うより、陽炎でそう見えるということですね。次の季語は「春の月」で大江丸の一句のみです。

☆ 人魚もとむ方士帰らず春の月 大江丸

方士は真面目に人魚をもとめに行ったのでしょうか？それとも人々を煙にまいて逃げたとか・・・？
(笑い)

会長 方士は「ほうし」とも「ほうじ」とも読みます。
方術・・・つまり神仙の道士です。人魚をさがしに行
って戻らない。春の月はロマンチックですから、人魚につか
まって遊び呆けているだろう・・・
という句です。

高橋 成る程、季語の持つ感覚をもっと大切に句を読む
様にとのことですね。
三ページ目に入りますね。季語は「春風」で、三
句ありますよ。一句目は炭太祇の句で

☆ 春風や長刀持の目八分 太祇

会長 「目八分」は、目を細めて「薄目」して心地よい
風を受けているということですね。
どこが可笑しいのかといえば長刀持ちは厳しい顔
をしているのに春風に顔がゆるんでしまうという
ことです。

高橋 成る程、そう言うことですか？
二句目、三句目は一茶の句ですね。

☆ 春風や牛にひかれて善光寺 一茶

☆ 狗が鼠とるなり春の風 一茶

二句目は善光寺参りの様子で有名な句ですね。三句目は、文字通りいぬが鼠を取ったと素直に考えていいのでしょうか？

会長 善光寺と牛の因縁話は有名ですよ。無信心なおばあさんが川で白い布をさらしているところ、牛が現れて布引っ掛け走り始めた。
おばあさんは追いかけたが疲れ果て、牛に引かれて辿り着いた先が「善光寺」という話をそのまま句にしたものですね。

狗は犬・ネズミを獲るのはネコでしょうが。狗がネズミを獲る可笑しさですね。
善光寺での句かどうかわかりませんが善光寺の境内の香炉の上に狛犬がいて煙を吐いているように見えますね。そのあたりをネズミがうろちょろしていたのか・・・想像でしかありません。

高橋 次の季語は「朧月」で二句ありますよ。

☆ 梟にあはぬ眼鏡やをぼろ月 其角

☆ だまされて狐渡しぬおぼろ月 梧葉

朧月の夜、狐が化けた粋な女に船頭さんが騙されて・・・なんて想像してみると面白いですね。
(笑い)

会長 梟は冬の季語でおぼろ月は春でなんてことはあまり喧しくいわなかったのですね。

二句ともに可笑いですね。特に二句めの船頭さんが騙されたというのは面白い。

高橋 次の季語は、「朧」で紅緑自身の句が二句ありますね。

☆ 月の中兎と臼は朧にて 紅緑

☆ 朧夜の人を怖すや人違ひ 紅緑

朧夜に知人に出会ったと思って、後ろからそっと近づき「ばっあ！」と肩でもたたかれると、叩かれた方は、「ぎゃーあ！」
・・・中には、卒倒する人が居るかも・・・
これが人違いだったら・・・
想像してみるとなかなか面白いですね。（笑い）

会長 後ろからでなくても、いや、前からの方が可笑いですね。〇〇さん早かったじゃないですか などと言って握手を求める段階で人違いと判明。相手は恐怖・・・ですね。
月の兎と臼の句は滑稽というより童心そのものですね。

高橋 次の季語は「春雨」一茶の句が三句ありますよ。

☆ 春雨や喰れ残りの鴨が啼 一茶

☆ 穴蔵の中でもものいふ春の雨 一茶

☆ 春雨や猫に踊ををしへる子 一茶

一句目は人間を中心に考えれば、まだ啼いてる鴨は、確かに喰れ残りですね。

二句目、ものいふが雨の修飾語だとすれば、穴蔵が雨漏りしていて、それが盥か何かに当たってぴんとんぱんとんもの言ってる様に聞こえるという事でしょうか？

会長 「喰れ残りの鴨」がいいですね「残る鴨」なんて言わない。
穴蔵の中でもものいふ・雨にたたられて岩穴に避難しているのでしょうか。
そこで独り言なんか言うわけですね。
「猫に踊をしへる子」は雨に足止めされている子の相手はネコで・・・からかうとネコは躍るようなしぐさになります。

高橋 えっ！二句目のもの言ってるのは、文字通り詠み手自身なのですか？
次の季語は、「初雷」で二句ありますよ。

☆ 初雷に田螺の臍も肥江てけり 鳴雪

☆ 初雷や落ちて浅間の石となり 碧梧桐

いずれも詠み手がそう感じたということですね？
やっと「春の天文の部門」26句がおわりましたよ。（笑い）

会長 そうですね。
「感じたままを書くと結果として滑稽になる」
は兼ねてから諸所に書いているところですが断定しているからよろしいのです。
初雷や田螺の臍を太らせる
初雷の落ちて浅間の石となる・にしてもよろしい。
鳴雪と碧梧桐から叱られるかもね

高橋 では、これまで出て来た季語「初日・初空・霞・陽炎・春の月・春風・朧月・朧・春雨・初雷」の中から、思い付く会長の句も列挙させて戴きますね。

- ★ 春の月歩幅にゆれてをりにけり
- ★ 春風とあなどり帽子飛ばされる
- ★ 春の風耳にあつめて自転車漕ぐ
- ★ 陽炎のゆらゆらも描き豆画伯
- ★ 離陸せり陽炎の壁突き破り
- ★ 石を割る石工も鑿(のみ)も陽炎(かげろ)へり
- ★ いよよ朧に写メールの春の月
- ★ YESともNOともつかぬ朧の夜
- ★ 春雨は春新年の春の雨
- ★ 新品となり登場の初日かな
- ★ 空つぼの空のことなり初御空
- ★ 聞耳の先初雷にとがらせる

会長の句を108年前の句と比較させて戴くと面白いですね。

会長 こうして先輩の滑稽句を見てみると出来事を描いている。
しかし、そこに詩がある。滑稽があるということです。
事柄俳句は良くないといいますが単なる報告になった場合です。そこんところを今日は確認できました。

高橋 成る程、素晴らしい結論を導かれましたね。勉強になります。
今日は、百七十四ページ中、最初の一ページ足らずの句の鑑賞が終わりました。

会長、ご自身が読破を目標にはじめられたのですから、なかなか大変なようですが、次回もこの調子で108年前の滑稽句の世界ご案内下さいね。今

日はやはり面白く学習出来ました。次回も面白い
ご解説期待しています。ありがとうございました。

会長 期待とは英語で言へばプレッシャー

高橋 会長は英語の俳句もお得意なんですね

会長 だけど・・季語がなかったですね(笑い)

(2009年8月号)